シリーズ
元気です 48

イノシシとの知恵比べ

左 下田初男さん Hatsuo Shimoda　右 下石　毅さん Takeshi Oroji

佐治猟友会

深刻なイノシシによる農作物被害

イノシシが山から人里へ下りて来始めたのは今から約30年前。昔は、ドングリやシイなどの木の実やサワガニを食べて生活していましたが、山にえさが少なくなってきたため、農作物を食べるようになりました。稲や芋類が好物で、果物やタケノコなど、人間と同じようなものも好んで食べます。

こうして栄養状態がよくなって繁殖力も増し、1年に5、6頭を産み、その子どもたちは山を知らないから里で生息するようになりました。近年、イノシシによる農作物被害が年々増え、農家にとっては死活問題です。

このイノシシ被害の防止に一役買っているのが、佐治猟友会のみなさんです。メンバーは40歳代から80歳代までの32人。職業は農業や会社員、公務員などさまざまです。会長の下石さんは現在70歳。「25、6歳のときに猟友会に入りましたが、当初は野ウサギや山鳥の狩猟がほとんど。熊が出たと大騒ぎしていたらイノシシだった」と当時を振り返ります。

また、昭和50年から会員になったという事務局長の下田さんは、「佐治町を代表する特産物の一つである梨の被害が深刻。イノシシは梨を食べるだけでなく、枝を折るので梨農家にとってはたまったもんじゃないですよ。村の産業課長をしていた当時、いてもたってもいられなくなって」と加入のきっかけを話されます。

シシ猟は長年の勘と仲間との呼吸

イノシシの狩猟期間は11月から翌年の2月までの4カ月間。「猪突猛進（周囲の状況を考えずに、一つのことに向かって猛烈な勢いで突き進むこと）」という言葉がありますが、イノシシは警戒心がとても強く、慣れた場所でも周囲をよく確認してから行動します。また、嗅覚も敏感で、人間よりも先に人間の臭いを感じ取る能力もあります。

猟はまず、足跡を探すことから始まります。5～8人で1グループとなり、イヤホンをつけ無線でやりとりをしながら、谷を分けて足跡の向いている方角へと山を登ります。よほどの悪天候ではないかぎり、ほとんど毎日、朝8時過ぎに自宅を出発し、夕方5時頃ま